

クラス番号	645	担当教員名	藤井 克美
テーマ	障害児教育・福祉実践と対人援助方法を考える		
著書・論文	・「ベトさんドクさんとの出会いから」『手づくりの国際理解教育』クリエイツかもがわ2008 ・「近代盲聾教育の始祖：古河太四郎」『障害者教育・福祉の先駆者たち』麗澤大学出版会2006 ・「聾学校と聴覚障害教育」「難聴」『キーワードブック障害児教育 特別支援教育時代の基礎知識』クリエイツかもがわ 2005		
研究課題等	・「聴覚障害の自己認識の実践的研究」『障害者問題研究第 30 巻第 3 号』2002 ・「聴覚障害児の性教育—京都府立聾学校の実践に学ぶ—」『障害者問題研究第 25 巻第 3 号』1998 ・「耳の不自由な子どもたち」編『障害を知る本 第 5 巻』大月書店 1998 ・「聴覚障害教育の現状と課題」『障害者問題研究第 21 巻第 4 号』1994		

ゼミナール概要

キーワード：福祉・教育実践、自己決定、主体、QOL、環境、ユニバーサルとパーソナル

<目的、内容、方法等>

当ゼミでは、障害児者教育福祉の実践として支援方法のあり方を明らかにすることを目的とする。障害者本人が主体的に生き、幸せに安心して生活できるように援助する障害児者福祉の本質に迫れる具体的方法を考えていく。これを、障害者本人の内面の豊かさや生活の QOL を高めることと、支援者の主体的あり方と、環境を変える視点との関係でみていく。障害児者やその家族もそれぞれ一人の人間として幸せに安心して暮らして社会福祉は、支援者自身の主体とも対等な関係であり、さらに、地球環境をも視野に入れた日常生活水準の環境への共同の働きかけでもあるからである。ここでは支援者を援助する視野も必要になる。その中で、障害児者の具体的なニーズに対応した支援・指導方法のあり方が明らかになると考える。

そのためには、障害児者の諸問題を、障害者観の変遷も含めて歴史的にとらえ、現代の中で総合的に把握することが求められる。近年、ICF に代表される障害の捉え方の大きな変換は、障害を個別に医学的にのみ捉えるのではなく、社会的に把握し環境との関係で捉えようとしたことである。障害児者がおかれている現状を正確に押さえ、現在、また、未来において変革していくために基礎作業であり、障害を持っている個人に責任を還元させないためにも必要な学習である。そしてなお、障害や発達を把握する行動アセスメントなどの技法も必要になってくる。

人間はどのような環境でより人間らしく生きることができるのか、各種の障害を持っている場合にはどのような環境を整えることによってその自己実現がなされるのか。ユニバーサルデザインを策定し、その中でパーソナルが尊重される環境が望まれる。それには、障害のある個人の日常生活に焦点を当て支援方法を作り上げていく必要がある。そのために、一人の障害者が生活している環境を生活スタイルやその動線にそったいわば環境アセスメントをきちんとしていかなければならない。そして、本人の自己決定がもっとも重視される状況を創っていくための検討を進める。

研究対象は、障害者福祉・障害児教育の現場、学童、保育所、家族などを想定している。それぞれの現場とコンタクトを採ることから研究が始まるので、そのプロセスも大切にしたい。

<授業計画>

3年次の前半は、障害児者福祉教育関係の図書を読み、ゼミメンバーが共通理解と研究をしていく土台をつくる学習を進める。そして、各自が自分の問題意識を明確にしていけるようにする。

3年次後半は、問題意識の中の対象とする障害児者個人を把握する方法を学習する。これは、視覚障害、聴覚障害、肢体障害、知的障害、また、自閉症、LD、ADHD などの障害を持っていることからくるニーズの把握する力を育てるためである。障害のある人の生活歴、発達、内面を深く捉え、日常生活場面で環境との関係で行動のアセスメントができるようにする。そして、卒業論文執筆の計画を立て、序論を書き始め、調査活動に入る。

4 年次前半では、アセスメントしつつかわった対象者についての記録を整理したり、インタビューしたり、アンケート調査したことを整理する。

4 年次後半では、早い時期に卒業論文をまとめる。9 月には本論を仕上げる合宿をする。

担当教員からのメッセージ



障害のある人や家族、指導者や関係者にていねいに寄り添い、あわせて客観的に観ようとする構えを育てたい人を歓迎します。支援や指導方法を考えるとき、社会福祉学、教育学、心理学、経済学等々の諸学の融合と連携をはかり、人間存在そのものを多角的総合的に捉え、幅広く学習することを大切に、自分の興味関心に焦点当てて学びあいましょう。